

短歌募集

△課題 隨意

△べ切 毎月末日

△發表 本誌上

△賞品 三光に粗景を呈す

△選評 眞宮起雲

△投稿 用紙隨意清書して左記の所へ送らる可し

但添削返稿を望まるゝ方は往復葉書又は切手封入のと

「伊勢國白子局下稻生みどり會」



短歌 眞宮起雲選

四十

(天) 中村鶴聲

うつくしきおん歌のごと一つく光をつるしら玉の瀧
評 悶え持つ闇の子は胸を照すらんおん歌にたとへしは妙

(地) 玉尾紫水

山住みやあした草戸に風かなる糸蘭の花つゆうつくしき
評 幽趣、佗居の人何となく氣高し

○ 吉川紅花

若人がうたげ催す夏ざしき青葉すゝしうひる小さめする
さつきの夜蕩の氣眞白に谷をうづめ星遠くしてやま子規

○ 松田小波

うらやさし醜草しげる夏の野に異香薫する小百合眞白き
新嫁が早苗とる唄半にて笑みくづれたるなよすがたかな

○ 清水光風

ア、杜鵑大竹敷をよこさまに嵯峨へ一里はひと聲にして
夕燈姫がたもとをそとすべり人呼ぶかたと船よりふねへ

○ 佐藤翠川

高麗の瓶の古色に忘れたり菖蒲むらさきうたにすべくも
笑めば子の頬照り林檎の紅と玉の齒しろう甘きつゆちる

○ 森白浪

き、馴れし聲の船追ふすゞみの夜月に反きて掉とりし哉

大西 益子

○ 悲みの運命に泣くも女てふか弱きせちとうまれしゆゑに

○ 平岩 學洋

住みかへて蛙きく夜の夢ごち古里思ふうたおほく成る

○ 加藤 六花

五月雨や青梅おつる草むらに黒き胡蝶のいきざしあらし

○ 田中 不二

うす絹に薔薇の紅そとつみ船流す子になげても見たき

○ 紅 花

亂れ髪風にふかせて木の間ゆけば老い驚や朝ほといきす

○ 鶴 聲

優うも玉蘭出でし蝶々のあさ眉つくるみどり小まどに

○ 淡月 漁郎

夏旋や天幕張る子の頬はやせて朝雲うつしゆふべ歌練る
玉とちり奇火と結び宇治川に壺古武者のたまとも見ゆる

○ 林 静子

水底の真珠ことく光り得てわが船あかし後の夜の月
たどります夏野まじろの露草に又も御袖の濡りてやあらむ

○ 鈴村 仙子

朝月のしろき光りを身にしめて青葉の泉めぐりても見し
夏あした道逢きよき真砂路に同じ詞べのなみをきくかな

○ 吉川 紅花

薄絹に雪の白肌玉すきてふめるに似たりあさもや小百合
強ひられて緒季とる夜の夏座敷さし入る月の餘りに明き

母なくば我や冷たき洞に入りて

朝夕を杜鵑さかむ

夏花や小さく真白き光りなけて

世に悶え持つ子の胸に入れ



青柳の枝も動かぬ夕ぐれに

かすそふまりのおとものどけし

(加藤 千蔭)